

---

# 他世界への介入者

地獄の傀儡師

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

他世界への介入者

### 【NZコード】

N24220

### 【作者名】

地獄の傀儡師

### 【あらすじ】

青年は世界を呪い否定された世界にただ一人いた。

だがある人物の違う世界に行かないかと言つ言葉を聞いた青年はそれを了承し違う世界に向かう。

介入者となつた彼に世界はどう反応するのだろうか？

ガンダムなどロボット物の夢小説です。

あまり面白いか自信はありませんがよかつた楽しんで読んでください。

プロローグ（前書き）

プロローグです。

## プロローグ

青年は世界を呪つた

自分の存在を否定した世界を

青年「この世は俺を否定する。俺は何処に行けば普通の人間として見てくれるんだ」

青年は闇を操れる特別な力があった

それは先祖代々受け継がれる力

青年は助けらないと思われた人達をその力を使って救った

だが結果は周囲から気味悪がれ助けた人にさへ自分を否定された

何がいけなかつた? 何故人を助けたのに自分が気味悪がれなきやいけない?

助けずに見捨てればよかつたのか? 助けなければよかつたのか?

青年「俺は」の世には必要ない存在のようだな

何をしても結局感謝されるのではなく、周りから人が消えていくだけ

青年「それやう時間だな」

だが青年には一つだけ楽しみがあった

青年「再放送でもやっぱガンダムは飽きないな

そうガンダムなどのロボット物を見ている時だけ、時間を忘れることが出来るのだ

青年「俺もガンダムなどの世界に行つてみたいな」

この世界に俺の居場所はない。なり違つ世界に行つても問題ないだり

青年「まあそんなトリップや転生する話何てありえないな」

青年がそう思つた時

? 「行きたいんなら行かせてあげるよ」

青年「誰だ？」

誰かの声が聞こえ振り返るが誰もいない

? 「貴方は行きたいの？」

青年「何処にだ？」

? 「ガンダムなどの世界に」

青年「行けるものなら行きたいな」

? 「本当にいいの？ いない間誰も心配しないの？」

青年「両親は既に他界していない。だから問題ない」

? 「じゃあ案内するよ」

その声が聞こえた後俺は意識を失つた

これは青年が力を得て他世界に介入する物語の最初のいちまくである

## プロローグ（後書き）

次回自身の力と機体入手それと一緒に平行世界に行く仲間を選びます。

ちなみに台詞の前に名前を書くのは、自分が誰の台詞なのがが分からなくなってしまうからです。

それでも読んでくれるのなら次回から宜しくお願いします。

## 能力と機体と仲間入手（前書き）

題名の通りです。

馴文ですが宜しくお願いします。

## 能力と機体と仲間入手

青年「此所は？」

目が覚めたら全く知らない空間にいた

？「目が覚めた？」

声が聞こえ振り向くと其所には一人の女の子が立っていた

青年「君が俺を呼んだのか？」

？「うんそうだよ。じゃあ目が覚めたら早速貴方に能力と仲間を  
与えるね」

青年「ああ頼む」

？「能力はとりあえず一ユータイプ SEED 純粹種イノベータ  
ーでいい？」

青年「ああそれだけあれば十分だな」

? 「仲間だけどパイロット4人と艦長を一人決めていいよ」

青年「じゃあ逆シャアのアムロ・レイ 〇〇セカンドの刹那 Wエンドレスワルツのヒイロ・ゴイとゼクス・マーキス 艦長はブライト・ノアさんで」

? 「了解 戰艦はどうある?」

「これは普通ラーカイラムと言つところだが

青年「あえてマクロス・クオーターで」

一回やつてみたかったんだよな

? 「了解 それじゃあ早速行つてもうつけど

青年「ちょっと待て俺の機体は何なんだ?」

女の子の言葉を遮り聞いた

? 「機体は貴方が作ったプラモ、テルの中で氣にいっている物の中から、私が適当に選ぶからそれに乗つてもうひつよ」

青年「氣に入っている物なら大丈夫だな」

初代のザク何かが搭乗機ではさすがに弱すぎるからな

? 「後選んだプラモ、テルが改造してあつたら改造した通りの機体に乗ることになるから」

改造した通りなら俺は色々武器持たせたりしてるから武装が豊富そうだな

? 「それじゃあ行く前に注意事項を言つておくれね」

青年「注意事項?」

? 「まず選んだ仲間の機体は最初は最強機体の一いつ前だから、まあ後々ストーリーが進むにつれて最強機体は出るよ多分」

青年「今最強機体がその内出るの後多分つて言わなかつた?」

? 「き気のせいだよ。えつと次は機体性能と大きさは向かった世界に合わせるから」

この条件は恐らく強すぎたら困る為そつするのかな?

? 「次は最初はどの陣営にも属してはいけない」

青年「最初は中立を貫き、終盤は中立か何処かの陣営に行くかは任せると誓つことか?」

? 「そういうこと。次は向かつた世界の話が完結したら強制的に此所に戻つてもらつから。ああ後また次の世界に行く時仲間と戦艦を代えることが出来るから、ちなみに君の機体も勿論代えるからね」

青年「分かった」

? 「最後に他世界に向かつたらその世界の死すべき運命の人を必ず一人救うこと」

青年「救えなかつたら?」

? 「そしたら貴方は元の世界に強制的に戻つてもいいつよ  
「

青年「ああ了解した」

? 「それじゃあこれから向かってもいつかど他に何か欲しい能力とかある?」

既にSEEEDとかもうつているのにまだ何か頼んでもいいのかよ

青年「じゃあボソンジャンプ出来るよ! こじてくわ」

? 「それだけでいいの?」

いや逆にまだいいのかよ

青年「じゃあ俺の闇の力を機体も使えるようにこじてくわ」

? 「了解。他には?」

お~お~まだ何か能力くれるのかよ

青年「後は刃が黒い日本刀を機体と俺にくれ」

? 「分かったよ

青年「とりあえずそれだけで」

? 「了解。ああそう言えば貴方の名前は？」

青年「名前言つ必要あるのか？」

? 「うん一応ね

名前がそんな物すぐに捨てたから無いんだが

青年「俺の名はカイト カイト・トウサカだ」

ちょっとパイロット風に言つてみた

? 「カイトさんかいい名前だね」

適当に考えた名前何だがな

カイト「君の名前は？」

？「私はレンと申します」

カイト「こちなりで申し訳ないが彼女になつてくれ」

レン「え！そそんないきなり／＼／＼」

カイト「ふつ冗談だよ」

レン「カイトさんの馬鹿。ヒロインと好きなだけ関係もてるよつにしてあげようと思つたのに」

カイト「えーマジで？」

レン「今の発言でやめました。ヒロインはカイトさんが最初に軟派した女の子にしましたから」

カイト「何ー、それでは他世界で軟派が出来ない」

あれちょっと待て俺つてこんなキャラだつけ?

カイト「うほん、えつともう行けるのか?」

レン「行けますよ」

レンがそのままと一つの扉が出現した

カイト「それじゃあ行くとしますか」

レン「何か分からぬことがあつたら私を心の中で呼んでください  
ね」

カイト「ああ了解した」

レン「それではお気をつけで」

レンが扉を開き俺はその中に入った

こうして力を手に入れた彼の物語が始まる

果たして世界は彼をどう見るのだろうか？

## 能力と機体と仲間入手（後書き）

次回他世界に介入します。

では次回もよかつたら楽しんで読んでください。

## 他世界（前書き）

戦闘シーンが非常に難しい。

でも頑張っていきたいと思います。

## 他世界

カイト「此所は?」

扉の向こうは戦艦のブリッジのようだった

カイト「マクロス・クオーターのブリッジか」

そう言い周りを見回していると

アムロ「此所は一体?」

ブライト「ラーカイラムのブリッジではないようだな

刹那「何故俺はこんな所に?」

ヒイロ「何故俺達は戦艦に乗っている?」

ゼクス「どうなっているんだ一体?」

周りには俺が仲間で選んだ人達が状況が掴めない状態で立っていた

カイト（レン）

俺は心の中でレンを呼んでみた

レン（どうかしましたかカイトさん？）

よじとりあえず連絡は出来るようだな

カイト（仲間で呼んだ人達全員が状況が掴めていないみたい何だが  
？）

レン（「みんなさーい。仲間の人達に情報伝達するの忘れてました

おーおーおマジかよ

カイト（じゃあどうすればいいんだ？）

レン（カイトさんの口から伝えてください）

カイト（それしかないよな。分かつたやつてみるよ）

レン（頑張つてくださいカイトさん）

カイト（ああ出来る限りな）

レンと連絡を切り俺は全員を見た

カイト「取り込み中のどこの皆さんすいませんが俺の話を聞いてくれませんか？」

アムロ「君は？」

カイト「俺の名はカイト・トウサカ。今皆さんに何がおこったのかを教えます」

ヒイロ「お前はこうなった原因を知っているのか？」

カイト「はい実は・・・」

その後何故こうなったのかや自分が何者なのかを話した

刹那「つまり今の俺達は全く別の世界にいると言つことだな  
「

カイト「はつきり言えればそうなります」

アムロ「にわかに信じられない話しだな  
「

ゼクス「確かに」

ヒイロ「」の戦艦とお前以外に何か証拠はあるか?」

カイト「格納庫に行けば恐らく分かると思いますよ  
「

俺がそう言った後全員格納庫に向かつた

刹那「これは何故此所にエクシアが?」

ヒイロ「Wガンダムが何故此所に?」

ゼクス「何故破壊されたトールギスが此所に？」

アムロ「リ・ガズイは確か破壊された筈！」

ブライト「確かに彼等の機体を見ると彼等は別世界から来たと言えるな」

カイト「とりあえず全員集まつてください」

全員を集めた後一通り話をした

アムロ「つまり俺達は別世界の争いに介入し一緒に戦う為に君が呼んだということか？」

カイト「まあそういうことです」

刹那「俺達の世界に戻る方法は無いんだろう？」

カイト「方法はあります。この世界の争いを鎮静化すればいいんです。身勝手なのは分かりますが協力してくださいお願いします！」

俺は頭を下げる全員に言った

ヒイロ「いいだろ。戻る方法がそれしか無いのなら俺は戻す」

ゼクス「私もヒイロと同意見だ」

アムロ「それしか無いのならやるしかないな」

刹那「この世界から紛争を根絶する為に力を貸さう」

「どうやら全員力を貸してくれるようだ

カイト「すいません随さん勝手に巻き込んでしまって」

ブライト「何一つおどしも戦争を黙つて見ることなど出来んわ」

カイト「ありがとうございます」

ヒイロ「とにかく前はどこに乗れるのか?」

カイト「はい乗れます」

ヒイロ「敬語はやめな。普通に話せ」

カイト「分かった」

ブライト「此所には階級はない。全員敬語は無しとこい」とドジョウ  
だわう?」

ゼクス「了解しました」

ヒイロ「了解」

刹那「了解した」

アムロ「ああ分かった」

カイト「了解」

刹那「とにかくお前の機体とはあれか?」

刹那が指差す方向には黒と少し赤い部分のあるマスラオがあった

カイト「あああれが俺の機体だ」

どうやら今回はマスラオが俺の搭乗機らしい

刹那「俺が前に見たものより形状が若干違うな

カイト「改良してあるから当然だ」

ブライト「戦力は今のところ5機との艦だけか

カイト「艦長にはこの艦を完璧に使えるようになつてもらわないと」

ブライト「ああその点については任せてくれ」

そして軽い自己紹介を格納庫でしていると突然警報がなった

ブライト「何だ？」

トーレス「艦長こひらに所属不明艦からMSが発進し此方に向かってきます！」

あれトーレスさんはいるということはラーカイラムの乗組員がクォーターに乗っているのかな？

ブライト「今からブリッジへ向かう、カイト達は自機に乗り機体状況をしててくれ

5人「了解！」

ブライトさんはブリッジに行き俺達は自身の機体に乗り機体状況を確認した

カイト「ブライト艦長

ブライト「どうしたカイト？」

カイト「向かってくるMSの映像を俺に見せてください」

ブライト「分かったトーレス！」

トーレス「はい今映像を送りました」

MSの映像が送られてきたので俺はそれを見た

カイト「これはジンだな」

向かつて来たMSはSEEEDの世界の一般機ジン

つまり此所はSEEEDの世界といつじとか？

ブライト「どうだカイト奴等は敵か？」

カイト「はい恐らく話も聞いてくれないと思います」

この世界はナチュラルとコーディネーターが争っている時代

恐らくコーディネーターの連中は俺達に攻撃を仕掛けてくる筈

トーレス「MSからミサイルが発射されました。数は10」

「ブライト」「くつ！撃ち落とせ！」

どうやら連中は仕掛けってきたようだ

ブライト「カイト アムロ 刹那 ヒイロ ゼクス全員出撃していく  
れ」

5人「了解！」

全員力タパルトにつき

アムロ「アムロ リ・ガズイ行きます」

刹那「エクシア 刹那・F・セイエイ出る」

ヒイロ「Wガンダム発進する」

ゼクス「トールギス出るぞ」

カイト「カイト・トウサカ マスラオ出る」

俺達5人は出撃し宇宙空間に出た

カイト「流石改造した機体だな」

コックピットで機体の武装を確認し俺は呟いた

カイト「それにGNドライブがオリジナルになつているとわ」

機体内で驚いている

アムロ「敵機確認手早く片付けるぞ！」

どうやら敵機を捕捉したようだ

4人「了解！」

俺達は散開して敵機と戦闘態勢に入つた

ザフト兵「ナチュラル」ときが…

カイト「邪魔だ！」

俺は両手に持っていたビームサーベルでジンを一刀両断し進む

ヒィロ「目標確認破壊する」

ヒィロはMS部隊にバスター・ライフルを放ち進んでいる

刹那「目標を駆逐する！」

刹那はGNソードとライフルでジンを撃墜している

ゼクス「遅い！」

ゼクスはドーバーガンで牽制し一気に敵機に近づいて近接戦で破壊している

アムロ「其処だ！」

アムロは持ち前の射撃能力で次々ビジンを撃ち落としている

カイト「流石エースパイロットだな」

俺はアムロ達を見ながらそのまま敵機を斬り裂く

戦闘はそれから数分で終わった

思ったよりあっけなかつたな。まあ歴代の最強パイロットが相手ではそうなるか

全員クオーターに帰還し現在ブリーフィングルームにいる

ブライト「この世界のことについてカイトから説明があるやつだ。  
ではカイト頼む」

カイト「はい。今皆さんのところにある紙に載っているのが、現在ザフト並びに連合が使っている機体の一覧です」

刹那「この世界で戦っているのはそのザフトと連合か?」

カイト「ああそうだ」

ヒイロ「何故奴等は戦争をしているんだ?」

カイト「この世界では一般人間のナチュラル、そして遺伝子操作を受けた人間「コードィネーター」の一種類の人種がいるんだ」

アムロ「その二つの人種が戦争をしてるということかい?」

カイト「はい」

刹那「共存出来ないといつ理由でか?」

カイト「ああ刹那の言つ通り共存が出来ないといつ理由でこの戦争は始まつた」

ゼクス「コーディネーターとナチュラルに何か外見で違ひはあるのか?」

カイト「外見で特に違ひはない。戦闘能力がナチュラルよりある程度だと思う」

ゼクス「遺伝子を操作されたという理由だけでナチュラルは拒絶しているのか？」

カイト「ああ。戦争を始めたのもナチュラルの愚かな奴等がコードイネーターのコロニーに核を射つたからだ」

アムロ「それではティーターンズと同じじゃないか！」

カイト「そうだな」

刹那「何処の世界でも人は争い続けるのか」

アムロ「それが人類の過ちだとしてもやはり変わらないか

ヒイロ「俺達が動けばやはり標的にされるのか？」

カイト「ああ必ずそうなるな。恐らく戦闘はより一層激しくなるのが予想される。それに俺達という介入者が出現したことにより更にな」

ヒイロ「それでもお前は戦つのだ奴らへ。」

カイト「ああ当然だ」

ゼクス「なり早〜」んな戦いは愚かなことだと分からせてやらないとな」

アムロ「一度と回じ悪夢を引き起しれない為にもな」

刹那「戦争を引き起しする者を俺達が駆逐する」

ヒイロ「俺達がこの戦いを止める」

ブライト「そうだな。カイト君はビリだ？」

カイト「俺も監と回じだ。争いを無くすその為に俺はこの世界に来た。俺は何としても戦いを止めてみせる。」

アムロ「俺達はこれから共に戦つ仲間だ。改めて血口紹介をしよう俺の名はアムロ・レイ」

ヒイロ「俺の名はヒイロ・ゴイ

ゼクス「私の名はゼクス・マークス」

刹那「俺の名前は刹那・F・セイエイ」

ブライト「私はブライト・ノア」

カイト「俺はカイト・トウサカ」

ブライト「これから戦闘が激しくなるだろうがお互に最善を尽くして行こう。」

5人「了解！」

力を手に入れ仲間も得たカイト。そして彼の長い戦いがこれから始まるのだった

## 他世界（後書き）

次回はキャラ紹介などの説明です。

ではまた次回も宜しくお願ひします。

## オリキャラ・機体紹介（前書き）

キャラと機体説明です

## オリキヤラ・機体紹介

カイト・トウサカ

ガンダムなどのロボット物が好きな青年

見た目は普通の青年だが先祖代々受け継がれる闇を操る力を持つている

だがその力のせいで通常世界では周囲からは化け物と呼ばれていた

謎の少女レンに他世界へ行かないかと言われ、自身の存在が否定された世界にいても意味がないと思い他世界への介入者となつた

性格は普通だが信用していない人間には常に敬語を使う

所持能力

ニュータイプ SEEED 純粹種イノベーター A級ジャンパー

年齢は二十歳

## 機体説明

### マスラオ改

機体は〇〇に出て来るマスラオ。カイトが氣に入っている機体でもある

プラモモデルで改造などをしており、レンがその改造したマスラオを選んだので乗ることになった

見た目はマスラオと同じだが、GNドライブがオリジナルになつており、武装も改造したプラモモデルと同じ武装を搭載している

## 武装説明

### GNバークサーベル2本

### 強化サーベル（ウンリュウ・シラヌイ）一本

### ファングサーベル一本

## G NZビーム爪

### G NZビーム爪

#### 黒刀・斬影

武装はマスラオとスサノウの武器とカイトが思いつきで作った物である

ファングサーベルは20個のファングが連結している剣である

ファングを離しても実態剣として使用可能であり、ファングは彼の意思で自由自在に動く

誘導能力以外にも彼の支持で連結機能を使えばエフィールドのような盾や、腕に何個か連結することで剣にすることも可能

G NZビーム爪はカギ爪の形状をした武器であり、ビームを爪に流すことできームサーベルと同等の攻撃力になる

黒刀・斬影はレンに頼んだ武装で形状は日本刀であり刃の色は黒  
カイトの闇の力を使うことによって通常の実態剣以上の切れ味になる

ちなみにカイト自身もこの刀を所持しており、マスラオが持っているのはそれがMSの大きさになった物である

搭載システム

トランザムシステム

ダークネストランザムシステム

GNフィールド

ステルス

システムはたくさんないがトランザムと闇の力を連動させて使用出来るダークネストランザムが使用可能

スピード・パワー共にトランザムより上だが、闇の力をかなり使うのでカイトにかなりの反動がある

その為一度の出撃に一回使用出来る程度であり何度も使用するのは非常に危険

機動時は機体が真っ黒になり粒子も黒い粒子を放出しビーム攻撃なども全て黒くなる

この世界で一緒に戦う仲間

アムロ・レイ

容姿は逆襲のシャアの時

搭乗機 リ・ガズイ

刹那・F・セイエイ

容姿はELS戦の前

搭乗機 ガンダムエクシアR?

ヒイロ・ゴイ

容姿はエンドレスワルツの時

搭乗機 Wガンダム

ゼクス・マークス

容姿はエンドレスワルツの時

搭乗機はトールギス

ブライト・ノア

容姿は逆襲のシャアの時

カイト達の母艦マクロス・クオーターの艦長

## オリキャラ・機体紹介（後書き）

次回は原作キャラとの戦いです。

では次回もまた宜しくお願ひします。

## ザフトヒースVS歴代ヒース（前書き）

やはり戦闘シーンが非常に難しい

こんな駄文ですが宜しくお願いします

## ザフトヒースVS歴代エース

カイト「いつ戦闘になつてもおかしくない筈なんだがな」

初戦闘から何日か経つたが、何故かクオーターは敵機と戦闘ビームで遭遇すらしていない

だかその間にブライトさん達が、クオーターを十分動かせるようになつたからいいか

刹那「カイト」

カイト「どうかしたか刹那?」

不意に刹那が話しかけてきた

刹那「お前はイノベーターなのか?」

カイト「何故そういう思ひ?」

刹那「何故だろ?うなそんなん気がするんだ」

もう勘づかれるとは流石純粋種だな

カイト「お前の言つ通り俺はイノベーターだ」

刹那「ならお前のあの機体でトランザムバーストは可能なのか？」

カイト「それはやってみないと分からんがまあ可能だろ？」「

刹那「そつか」

そつと後刹那は行ってしまった

カイト「結局聞きたいことだけ聞いて行つちましたよ

その後俺はクオーター内を適当に歩いた

現在戦闘シミュレーターをやっている相手はヒロ

カイト「Wガンダムでマスラオを圧倒するとは

ヒイロ「其処だ！」

Wがバスター・ライフルを放つたのでそれを避けサーベルを抜きお互いのサーベルがぶつかった

ヒイロ「まだまだだな」

マスラオのサーベルを弾きWは変形して距離をとった

カイト「なら行けファング！」

ファングサーベルから10個のファングをWに放った

ヒイロ「誘導兵器かだが！」

Wはファングの攻撃を避けマシンキャノンで破壊していく

カイト「やはり一筋縄ではいかんか」

わざとファングをライフルで破壊し強化サーベル シラヌイを装備し突撃したが

ヒイロ「お前の敗けだ」

カイト「何！」

Wからバスター・ライフルが発射され画面には撃墜の文字が表示された

カイト「やはり接近戦専用では不利なのか」

ヒイロ「煙で隠れてただ突撃するだけではバレバレだ」

カイト「確かにそうだな」

ヒイロと話していると警報がなった

トーレス「敵艦接近数は1」

ブライト「敵が来たかMS隊発進準備！」

カイト「来たか」

俺はマスラオ改に乗り発進準備に取り掛かった

ヴェサリウス側

アデス「クルーゼ隊長戦艦らしき物を確認しました」

クルーゼ「ほう何処の艦だ?」

アデス「それがデータに存在していない艦のようです」

クルーゼ「どちらにせよ恐らく連合の戦艦だろう。私とアスラン達で迎撃する」

アデス「また隊長自ら出られるのですか?」

クルーゼ「ああ」

そう言つとクルーゼはブリッジを後にした

ブリーフィングルームにザフトエースは集まっていた

クルーゼ「今回の任務は所屬不明艦の撃破だ」

アスラン「所屬不明艦？」

イザーク「足つきを追つてゐるといふのに

ディアツカ「なら手早く片付ければいいだけの話だろ」

ニコル「今回もクルーゼ隊長は出撃するのですか？」

クルーゼ「ああ」

アスラン「何故また隊長が白らう？」

クルーゼ「じいて言えれば私の勘がな

アスラン「勘ですか？」

クルーゼ「ああ」

イザーク「とにかく手早く片付けて足つきを追いましょう」

クルーゼ「イザークの言つ通りだ。あまり時間を掛けず手早く片付けるべ」

4人「了解！」

ザフトエースはそれぞれの機体に乗り出撃した

トーレス「艦長敵艦からMS発進数は5！」

ブライト「MS隊発進！」

アムロ「了解リ・ガズイ アムロ行きます」

ヒィロ「Wガンダム発進する」

ゼクス「トールギス出るぞー！」

刹那「エクシア 刹那・F・セイエイ出る」

カイト「カイト・トウサカ マスラオ出撃する」

出撃し宇宙空間に向かうこれが二度目の出撃頑張らないとな

カイト「敵機はガンダムか」

宇宙空間には4機のガンダムとシグーが戦闘態勢に入っていた

アムロ「各機散開敵機を撃墜しろ」

4人「了解！」

俺達は散開し俺のところにイージスが向かってきた

カイトVSアスラン

アスラン「何だこの機体は！」

カイト「イージスかそんな機体などで…」

マスラオのビームサー贝尔を抜きイージスに突撃する

アスラン「くう」

イージスもビームサー贝尔を出し応戦したが

アスラン「くつ 何てパワーだ」

アスランは手間取っていたイージス以上のパワー スピードを持ったマスラオに

アスラン「それに何故レーダーが機能しない？」

GNDライブの影響でレーダーも効かないのに更に手間取っていた

アスラン「こーーー」

イージスはサーベルでマスラオを弾きビームライフルを連射したが

カイト「避けるまでもない」

カイトはそれを全てサーベルで弾き

カイト「行けファング！」

イージスにファングを発射した

アスラン「何だこれは誘導兵器か？」

カイト「止まっているとはいい一度胸だな」

アスラン「チイ！」

イージスは避けてはいるがかなりギリギリのようだ

カイト「うわちも注意しないと」

イージスにライフルを放つ

アスラン「くつー遊ばれているのか?」

カイト「ふつそろそろ終わらせてまひうつ

ファングを戻し黒刀・斬影を抜き

カイト「闇よ我の剣に宿れ!」

斬影に漆黒の闇が集中し刃が更に黒くなる

アスラン「何だあれは本当に剣なのか?」

イージスはサーべルを構える

カイト「行くぞ!」

マスラオでイージスに突撃すると

アスラン「ハーアー！」

イージスも此方に突撃しサー・ベルと斬影が一瞬ぶつかり

ズバンツ

アスラン「何！」

斬影がビームサーベルごとイージスの腕を斬り裂いた

カイト「ファング！」

驚いているアスランをよそにファングを放ち武装と手・足を破壊した

アスラン「チイ撤退するー！」

イージスは戦闘続行不可となり撤退して行つた

アムロVSクルーゼ

クルーゼ「あの5機以外に機体が存在していたとはなー。」

アムロ「ん何だこの感覚は?」

アムロはシグーを見ながら言つ

アムロ「あの機体のパイロット底のない悪意を感じる」

クルーゼ「ちよつといいその機体を貰い母艦を落とさせてもいいつー。」

シグーは重突撃銃を乱射しながら・ガズイに近寄るが

アムロ「そんな攻撃!」

アムロはそれを全て避け

アムロ「其処だ!」

シグーに向けビームライフルを放つた

クルーゼ「チイ！」

シグーは回避行動をとったが片足を打ち抜かれた

クルーゼ「機体だけでなくパイロットも相当な腕のようだな」

シグーは重斬刀を抜き突撃銃を乱射しながら接近するが

アムロ「甘い！」

アムロはシグーの射撃をかわし接近する

クルーゼ「もうつた！」

シグーはリ・ガズイに重斬刀を振るつたが

アムロ「遅い！」

ズバッ

アムロは重斬刀の斬撃をかわしビームサーベルでシグーの片腕を斬り裂き

アムロ「落ちろー。」

ビームライフルを連射しシグーの両手足を破壊した

クルーゼ「くつーまさかこれほどとは撤退する」

シグーはヴェサリウスに撤退した

刹那∨S∨コル

刹那「くつーまさか迷彩処置をした機体がいるとは」

ニコル「墜ちろー。」

刹那は現在ブリッツと戦闘中だが、ミラージュコロイドによる迷彩状態で攻撃してくるブリッツに手こずっていた

刹那「すぐに消えるなら一瞬で決める」

刹那は止まりブリッツが来るのを待つ

ニコル「何故いきなり止まつたんだ」

ニコルは考えたいきなり止まつたガンダムを見ながら

ニコル「もう諦めたのか?なら...」

ブリッツはエクシアの背後に周りサーべルで斬りつけとした瞬間

刹那「其処だ!」

刹那はレーダーにブリッツが現れた瞬間斬撃を避けGNブレイドで両手を破壊した

ニコル「な何!撤退します」

ブリッツも戦闘不能となり撤退した

ヒイロ／＼イザーク

イザーク「このチヨロチヨロヒー！」

ヒイロ「実弾が効かないならサーべルで戦うだけだ」

ヒイロは変形しながら射撃を回避しサーべルを抜いた

イザーク「ナチュラル」ときが俺に勝てると感つた…

デュアルもサーべルを抜き応戦する

ヒイロ「何故互いに争ひひとしか出来ない？」

イザーク「ナチュラルは俺達コーディネーターの敵だ！そんな奴等と仲良くなじ出来るか！」

ヒイロ「お前もアイツ等と同じかな？」

サーベルでデュエルを弾き

ヒイロ「排除する！」

Ｗガンダムからバスターライフルがデュエルに向け放たれた

イザーク「ふんそんなもの！」

デュエルは盾を構えガードをしただが

イザーク「何シールドが持たない！」

バスターライフルの威力は通常ライフルの倍はあるので当然である

デュエルはシールド」と腕をもつていかれた

イザーク「チイ！」

ヒイロ「そこだ！」

ヒイロは変形しサーベルを抜き、デュエルのライフルを破壊した

イザーク「チイ俺がナチュラル」ときに！」

デュエルは撤退した

ゼクス▽△ディック

ディック「何だよこの動きは！」

ゼクス「砲撃主体のガンダムかならば！」

ゼクスはトールギスのブースターで一気に加速しバスターに接近する

ディック「そう簡単に接近させれるかよ！」

バスターはライフルとミサイルをトールギスに発射するが

ゼクス「甘い！」

ゼクスはライフルを避けミサイルを全てサーベルで破壊した

ディアツカ「なら！」

バスターはライフルを連結させ散弾をトールギスに発射した

ゼクス「そんなもの！」

ゼクスはブースターを使い上昇し散弾を避けドーバーガンをバスターに発射し

ディアツカ「な！」

バスターは回避が間に合わず連結したライフルが破壊された

ディアツカ「くそ本当にナチュラルかよ！撤退する」

バスターは撤退して行つた

カイト「言つた通り全員殺さないでくれたようだな」

俺はレーダーから離れる敵機を見て呟く

カイト「一応重要なキャラ達だから死なれたら困るしな」

クオーターから発進する前に、アムロ達に今回の敵機のパイロットを殺さないでくださいと言つておいてよかつたな

流石にアスラン達がいきなり死んでは話が全く分からなくなるし

カイト「とりあえずまずはアークエンジュルとでも接触かな」

トーレス「MS隊帰還せよ」

トーレスから通信が入った

カイト「了解。 さてこれからどうなることやら」

俺はそう呟きクオーターに帰還した

## ザフトエースVS歴代エース（後書き）

次回はジャンク屋と歌姫と接触します

では次回も宜しくお願いします

## 想定外の出会い（前書き）

更新送れてすいません

やはり戦闘シーンは書くのは苦手です

## 想定外の出会い

カイト「刹那敵機の反応は?」

刹那「レーダーでも反応無し付近にないよつだ」

現在俺と刹那はザフトレッジ達を避け今は偵察中である

何故俺と刹那なのはまあGNドライブの影響で視認されにくいか  
らである

ブライト「カイト　刹那周辺の状況はどうだ?」

ブライトさんが確認の通信を送つてきた

カイト「レーダーにも敵影はありません」

刹那「同じく反応無し」

ブライト「うか。もつ暫く偵察を続けてくれ」

カイト&amp;刹那「了解」

その後も暫く周辺の偵察を続けていると

カイト「うん? レーダーに反応」

前方に反応あり 数は7

3機はMSのようだがもう4機はMAか?

カイト「クオーターレーダーに反応確認。どうする?」

ブライト「反応地点に向かつて状況を確認してくれ。攻撃してきた  
ら戦闘しても構わん」

カイト「了解。刹那向かうぞ」

刹那「了解」

とつあえず俺と刹那は反応が出た所に向かつた

刹那「前方に機影を確認」

反応地点に向かうと2機のジンと3機のメビウスが赤いフレームのMSと戦闘していた

カイト（あの赤いフレームの機体恐らくレッドフレーム、といつことは近くに歌姫がいるのか？）

刹那「どうするカイト？全機撃墜するか？」

カイト「いやあの赤いフレームのガンダムを援護しよう」

刹那「その理由は？」

カイト「見たところザフトと連合どちらの味方でもないようだからだ」

刹那「ふつ」了解した

俺達は戦闘態勢に入りガンダムに通信を入れた

カイト「其所の機体のパイロット聞こえるか？」

？「何だアンタ達は？」

通信に答えてくれ返答しようとした瞬間

ザフト兵「落ち物ナチュラル！」

ジンが此方に重突撃銃を撃つてきただので回避し

カイト「雑魚がでしゃばるな！」

ザシコウ

ザフト兵「ば馬鹿なー！」

サーベルで一刀両断してやつた

カイト「これからお前を援護する

敵機の攻撃を避けながら答える

? 「すまないな巻き込んだみたいで」

刹那「もとよりお前を援護するつもりだったから問題ない」

刹那も通信にはいつてきましたようだ

? 「ありがとうな、俺はジャンク屋のロウ・ギュールだ

刹那「俺の名前は刹那・F・セイエイだ

カイト「俺の名はカイト・トウサカだ」

ロウ「刹那にカイトか宜しくな

カイト「ああ宜しく。さて敵が来たぜ」

いつの間にかジンが消え周りにはメビウスと連合艦がいた

刹那「ザフトは艦が来たことにより撤退したようだな」

ロウ「そつみたいだな。どうする?」

カイト「どうせ生きて返す気はないんだから全機撃墜しかない」

刹那「了解した」

ロウ「ああ了解」

二人がそう言った後俺達は連合艦に向かった

カイト「艦を落とせばメビウス」ときなら撤退する筈だ。メビウスを落としながら敵艦を落とすぞ」

刹那&ロウ「了解」

ロウ「このー」

ロウのレッドフレームはライフルとサーベルで上手くメビウスを落

とし

刹那「駆逐するー。」

刹那のエクシアはブースターを使いメビウスを次々とGUNブレードで破壊していく

カイト「行けファング！」

俺はライフルとファングで簡単にメビウスを撃墜する

連合兵「なつ何だこいつ等はー。」

連合兵「強すぎるー。」

連合兵が動搖しているようだがどんどん破壊していく

気がついたら敵は艦だけになっていた

刹那「降伏しろー。やうすれば見逃してやる。」

刹那が連合艦に呼びかけた。降伏しろよ無駄な殺生ば」「めんだからな

連合兵「誰が降伏などするものか！全では青き清浄なる世界の為に

！」

やつらは連合艦は俺達に攻撃をしてきた

ロウ「くそ何でだよ！何で攻撃してくれるんだ！」

カイト「完全にブルーコスマスの兵になつていいよつだな」

刹那「どうする撃墜するか？」

カイト「俺がもう一度呼びかける」

連合艦に通信を入れる

カイト「もつ一度だけやつ降伏しろー。やつあれば見逃してやる

降伏してくれよ頼むからよ

連合兵「黙れ！降伏などせん！奴等を叩け！」

連合兵士は降伏勧告を受け入れず攻撃を続ける

ロウ「くそー、ビリしてだよ！何で無駄に命を捨てるんだ！」

カイト「脣共が何故命を無駄にする！」

ファングを発射し連合艦に攻撃する

一瞬で連合艦は墜ちた

ロウ「くそー！」

カイト「馬鹿共が」

刹那「何処の世界も歪んでいるな

虚しい、敵を倒したのに何故だ？くそつ！

カイト「やはり非情になりきれないんだな」

虚しい気持ちでそう呟き俺はレーダーを見る

カイト「やはり反応があるか」

レーダーに一つ反応がある恐らく

刹那「カイト反応が一つあるが」

カイト「ああ行つてみよう」

口ウ「俺も行くぜ」

俺達は反応があつた場所に向かった

カイト「やはりか」

反応地点には一機の脱出ポットがあった

カイト（此所で歌姫を救出していいのだろうか？後々面倒なことになる気がするが）

どうしようか考えていると

ロウ「カイト脱出ポット拾わなくていいのか？」

いつまでもポットを拾おうとしない俺を見てロウが通信を入れてきた

刹那「速くしないと敵が来るかもしれません。カイト回収してくれ」

カイト「……分かった」

しうがなくポットを回収し戻ることにした

カイト「ロウ此所でお別れだな」

クオーターに向かうのでロウにそつと書いたら

口ウ「悪いんだがよホームとはぐれちまつたみたい何だ。おこがま  
しきどよ、暫くお前等の艦に置いてくれないか？」

嘘だろ原作と展開が違つたって、既に歌姫助けてる時点で違つか

カイト「分かつたらついてこい。刹那クオーターに帰還するぞ」

刹那「分かつた」

俺はクオーターに通信を入れた

カイト「クオーター今から帰還する」

トーレス「了解」

ブライト「何か収穫はあったか？」

カイト「脱出ポット一つとMS1機ですね」

ブライト「そりゃ一度帰還してくれ

カイト「あつ艦長味方とはぐれたジャンク屋がいるのですが、一緒にクオーターに向かっていいですか？」

ブライト「味方とはぐれたジャンク屋？信用出来るなら構わん」

カイト「ありがとウイザード様では帰還します

俺達はクオーターに向かつた

ロウ「スゲーな何だこの戦艦！」

ロウがクオーターを見てかなり驚いているようだ

まあこの世界にはない戦艦だから驚くのも無理はないか

カイト「着艦するからついてこい」

カタパルとに向かい全員無事に着艦成功

アムロ「二人共お疲れ」

ゼクス「何か収穫はあつたか?」

コックピットから降りたらアムロ達が来た

カイト「味方からはぐれたジャンク屋と脱出ポット一つぐらいだ

ヒイロ「そのジャンク屋とは奴のことか?」

刹那「ああ今クオーターを見ている奴だ」

刹那が艦内を見ながら驚いているロウを指差し答える

カイト「ロウ 仲間を紹介するからこっちに来てくれ

ロウ「ああ分かった今行く」

そう言ひロウは俺達の機体を見ながらこっちに来た

ロウ「スゲーな」の艦もアンタ達のミリもね、おつと俺の船前はジヤンク屋のロウ・ギュールだ」

アムロ「アムロ・レイだ宜しく」

ゼクス「私はゼクス・マークスだ」

ヒイロ「俺はヒイロ・コイだ」

ロウ「ありがとな見ず知らずの俺を艦に置いてくれて」

ロウが頭を下げて礼を言った

アムロ「何困つててこの時はお互い様さ」

ロウ「あつがとよトムロセ」と

ゼクス「やつらえば脱出ポットをまだ開けていないかつたな

ちつーそのまま放置しておけば面倒なことにならなこのこ

ゼクス「ロウあの脱出ポットに何か心当たりはないか?」

ゼクスが脱出ポットを見ながらロウに聞く

ロウ「俺が偵察に出てすぐあの近くでシャトルの反応が消えたんだ。  
もしかしたらそのシャトルの乗組員かもしれない」

ヒヤロ「开ければ全て分かることだ」

刹那「そうだな」

アムロ「よしじやあ开けるぞ」

アムロが脱出ポットを開けると

ハロ「开いた　开いた」

アムロ「これはハロか?」

? 「あらがとハジキモト」

ポットを開けるとピンク色のハロが出てきてその後ろからピンク色の髪の女の子が出て来た

刹那「女？」

? 「あらへ・あらへの艦はザフトの艦ではないのですか？」

カイト「はい」の艦はザフトの艦ではあります

? 「ではあなた方は連合軍の方ですか？」

ゼクス「いや我々はザフトにも屬していません」

? 「そうなのですか？」

ヒヤロ「とつあべずお前の名前は何だ？」

? 「私はラクス・クラインと申します」

ロウ「マジかよー。」

アムロ「どうしたロウ? 彼女の面前に心あたりがあるのか?」

ロウ「心当たりも何もラクス・クラインってフランソワ最悪評議会議長のシーゲル・クラインの娘じゃないか」

カイト「ああめんどこことになるなこつや」

俺は溜め息を吐きながらうつ歎いた

## 想定外の出会い（後書き）

次回は歌姫の遭遇についてです

ではまた次回も宜しくお願ひします

## 歌姫の処遇と人との違い（前書き）

今回は私自身が思う人との違いなどが書いてあります

## 歌姫の処遇と人との違い

カイト「あのラクス・クラインの処遇はどうします」

現在ラクス・クラインの処遇について話しをしている

アムロ「捕虜として扱うのが妥当だろ?」「

ヒイロ「だが敵のスパイかもしれない」

刹那「それは、警戒のしすぎだと思うがヒイロ」「

ヒイロ「あくまで可能性の話しだ」

カイト「スパイだったら始末すればいい問題ない」

ゼクス「まあその心配はないと思うがな」

ブライト「では決まつたな。処遇は捕虜として扱う」

まあ今のところ捕虜が妥当だろ？ それに俺は歌姫は好きじゃねえ  
しな

カイト「食事は俺 アムロさん ゼクスの三人で運びますね」

ヒイロ「何故俺と刹那ははいっていい？」

カイト「無口で無愛想な奴だと気まずくなると思つてな」

アムロ「確かに一理あるな」

ゼクス「ヒイロも刹那もいつも無愛想な顔をしているしな」

二人「大きなお世話だ」

などと話しをしていたら突然扉が開いた

全員「！」

ラクス「あのすいません」

ラクスがハロを持って部屋に入つて來た

ヒイロ「部屋の扉にロックをしなかつたのか?」

刹那「したに決まつているだろ?」

カイト「普通しない馬鹿はいないだろ?」

アムロ「どうかしたかい?」

ラクス「いえ、この艦の中を見てみたくて」

自分の立場が分かつてゐるのだろうかこの歌姫は?

アムロ「扉のロックはどうしたんだい?」

ラクス「この子が開けてくれました」

ハロ「ハロ開けた。ハロ開けた」

ハロが叫んでいる。普通ロック開けたりするか？

カイト「ラクスさん、あまり艦内を歩き回らないでください」

「ラクス、すいません」

ゼクス「貴方は、一応捕虜ですからそこは分かつていただきたい」

「ラクス、……はい」

カイト「では、部屋まで送りますよ」

「ラクス、分かりました」

俺はラクスを連れ部屋に向かった

ラクス「皆さんは、何故私がコーディネーターといつのを気にしないですか？」

部屋に送るとラクスが俺に聞いてきた

カイト「全員何で気にしないのかは知りませんが、私自身そんなちつぽけなこと気にしませんよ」

ラクス「どうしてですか？」

カイト「コーディネーターもナチュラルも両方人間、それを少し違うからって差別するなどくだらなくありませんか？」

ラクス「そうですね」

カイト「それに人間誰しも違うところは必ずあります。それがコーディネーターだから違うというのなら、ナチュラルで運動神経がいい者、歌が人より上手い者、周りの人間より遙かに頭がいい者も対象に含まれると思いますよ」

ラクス「何故、人より優れた者が対象に含まれるのですか？」

カイト「コーディネーターは、遺伝子をいじつて優れた能力を与えていると聞きます。ならその解釈をナチュラルでもすると、優れた能力があるナチュラルの者も、周りのナチュラルとは違つてくるのでコーディネーターと同じという解釈になると思うからですよ」

実際これが俺の、ナチュラルもコーディネーターもどちらも同じ人

間であるところの仮説の話である

ラクス「言われてみると、確かにそういうのかもしません」

カイト「まあ、やつこいつ」とですよ

ラクス「貴殿は、とても広い心をお持ち向ですね」

カイト「そんなことはありませんよ

ラクス「貴殿方のような人達が、今世にたくさんいれば、戦争などおきなかつたかもしれませんね」

カイト「それは、分かりませんよ」

ラクス「え？ それはどういう意味ですか？」

カイト「いえ、今の発言は気にしないでください」

俺はそう言い部屋を後にした

カイト「何で俺は、あの歌姫に素直に自分の考えを言つたんだろう？」

?

そんなことを呟きながら歩いていると

アムロ&amp;刹那「カイト」

アムロと刹那が後ろから声を掛けてきた

カイト「どうかしましたかアムロさんに刹那？」

アムロ「いや、さつき君が話していたナチュラルと『データベース』の話を偶然聞いてしまってな」

刹那「その話を聞いて、お前に聞きたいことがあってな」

カイト「ニユータイプそしてイノベーターと普通の人と、どう違うのか俺に聞きたいか？」

何となくそんな気がしたので聞いてみた

アムロ「ああ、君はどう違つと思つ？」

刹那「お前の考えを聞きたいんだ」

カイト「俺の中では、ニュー・タイプもイノベーターもよりよく分かれ合つ為に覚醒した人間だと思つ」

二人「よりよく分かれ合つ為に覚醒した人間？」

カイト「ああ、ニュー・タイプもイノベーターも優れた空間認識能力を持っている。馬鹿な奴等はそれを兵器の為の能力としか思つていい。だが本当はよりよく分かれ合つ為にそれはあるんだと俺は思う」

アムロ「何故、空間認識能力が分かれ合つ為に必要だと思つんだ？」

刹那「何か理由があるのか？」

カイト「認識能力の拡大などによる、意思疎通、精神の共感などが可能になるからだ」

アムロ「意思疎通に精神の共感？」

カイト「二人は既に何回かおこつている筈ですが？」

アムロ「ララアと分かり合えた時のことか？」

カイト「そうです」

刹那「トランザムバーストによつておきた、あの現象のことか？」

カイト「そうだ。そして二人はその力で分かり合つ」ことが出来たで  
しょう？」

アムロ「ああ、死なせてしまつたが確かに分かり合えた」

刹那「確かに、俺達は分かり合つことが出来た」

カイト「ニュー・タイプもイノベーターも、本来はその為にいるのだと俺は思います。確かに普通の人間とは少し違うかもしれません。だが人を分かり合わせる為に覚醒した者達だと俺は考えています」

これが俺の中でのニュー・タイプとイノベーターの仮説である

彼等は人類を分かり合わせる為に進化した者達なのかもしれない

だが俺は進化したという考え方ではなく、覚醒したという考え方である

いざれは人類の全てが「ユータイプやイノベーター」に覚醒するなどと思つていたりする

カイト「人間は違うところが必ずあります。それが、ユータイプだろうとイノベーターだろうと、結局はそういう力を持つた人間に変わりありませんから。」

二人「・・・」

カイト「まあ、結局何が言いたいのかと言つと、ユータイプもイノベーターも人間とあまり違い何てないんですよ。はつきり言えば普通の人より分かり合う力があるだけですよ」

アムロ「分かり合う力がある?」

カイト「ええ。俺はそう思います」

刹那「だが周りの仲間は」

カイト「自分は人間とは違うなどと云ひして、周りと距離をとる必要なんてないんですよ」

俺はそう言い剎那を見た

剎那「……」

カイト「貴殿方が、イノベーターだろうと、コータイプだろうと、周りの仲間はちゃんと一緒にいてくれるんですから」

アムロ「ふつそつだな。俺がニュータイプでもブライト達は一緒にいてくれたからな」

剎那「本当に、仲間は一緒にいてくれるのだろうか？」

カイト「それは、剎那君次第だ。君が心を開かず仲間と一緒にいれば必ず彼等は君と一緒にいるだらう」

剎那「……」

カイト「まあ俺が言いたいのはこれぐらいです」

俺はそう言い自室に戻った

ああそう言えば、ロウはクオーターにいる間はパイロット兼整備班の仕事をしてくれるそうだ

ちなみにロウは現在、ヒイロとゼクスがWガンダムとトールギスのビームライフルを製造してくれという依頼を受け、クオーターの格納庫でビームライフルを作成中である

何故か、クオーターの倉庫には様々な部品が保管されていたようで、それを見たロウが嬉しそうに見ていた所を、ヒイロとゼクスが見付けて依頼したそうだ

これでまた戦力は高くなつたな。 そう言えば全員のMSをまだ解析してなかつたから今度ロウに解析してもらおう

歌姫の処遇と人との違い（後書き）

「ユータイプやイノベーターのことはあくまで私の仮説です  
気にさわるようならすいません

ではまた次回も宜しくお願ひします

## 接触（前書き）

今回ばかりは前回の話から若干飛んでいます。

では今回も宜しくお願いします。

「ライト、あの娘を、ザフトに返すだと？」

クオーターのブリーフィングルームでライトがカイトに聞く

カイト「はい」

ゼクス「何か理由があるのか？」

ゼクスが俺を見て言つ

カイト「理由とこりより、ただ敵に狙われないようにする為ですよ」

正直俺は歌姫は嫌いな上に、アイツは敵も引き付ける疫病神と認識している

カイト「彼女はザフトのトップの娘です。恐らくもう俺達と一緒にいるけどばれてるでしょう」

ヒイロ「だからアイツを返し、ザフトの目から逃れよつと三つのか

？」

ヒイロは壁にもたれながら俺を見てそう言つ

表情があまり変わっていない以上、どう思つていいのかは分からんが

カイト「ああ、そのほうが俺達にとっともいいと思つてな」

まあ本当はアークエンジェルと接触する為だが

もし接触できなかつたとしても、疫病神をアスラン達に押し付けられるしな

アムロ「しかし、誰がザフトと接触するんだ？」

カイト「俺が、一人で行きます」

ゼクス「一人で行くのは、流石に危険じゃないか？」

カイト「問題あつませんよ。それに下手に数を増やすと警戒される

誰か居ても別にいいが、一人のほうが動きやすい為出来れば俺だけのほうがいい

ブライト「いいだろう。行つて構わん」

ブライト艦長があつさりと解してくれた

刹那「ブライト艦長、今日は流石に危険だと思うが？」

ブライト「確かにそうかもしない。だが下手に大勢で行くより一人のほうがいいだろう」

アムロ「だがブライト」

ブライト「それに、カイトの機体のGNドライブなら万が一敵に囲まれても姿を隠し帰還も可能だ」

まあ確かにステルスを使えばそれは可能だ、だが了解してくれるとはな

ヒイロ「なら俺も着いて行く」

カイト「何?」

ヒイロが思いもよらないことを言つてきた

ゼクス「ヒイロ本氣か?」

ヒイロ「ああ、俺が一緒にいけば問題ないだろ?」

カイト「ヒイロお前何で?」

ヒイロが一緒に行くと言つ発言が気になり聞く

ヒイロ「俺が一緒にいけば、もし敵に包囲されても問題ないだろ?」

俺の腕とヒイロの腕があればそう簡単にやられないと言いたいのか?

刹那「ヒイロが一緒になら大丈夫だな」

アムロ「それなら問題はないな」

ゼクス「ヒイロもまるくなつたものだな」

全員俺一人では心配だつたようだがヒイロが一緒に大丈夫だらう  
と言つてゐる

俺ってそんなに弱いのか?まあこの中では一番弱いと思つが

「ブライト」では決まりだな、カイトとヒイロはあの娘をザフトに返  
してきてくれ

二人「了解」

俺とヒイロはブリーフィングルームを出る

カイト「何故、着いて来る何て言つたんだ?」

俺はまだヒイロの発言が気になり聞く

ヒイロ「お前は俺達の仲間だ。死なれては困るからだ」

ヒイロが無表情で言ひ。ハンドレスワルツ時のヒイロの為なのか、味方を大切な仲間と思つてゐるようだ

まあヒイロにそつ思われてゐるんなら正直嬉しいがな

俺とヒイロはそのまま歌姫の部屋に向かつた

コンコン

カイト「ラクスさん、居ますか？」

歌姫の部屋をノックしいるか確認する

ラクス「はい、おりますよ」

カイト「入つてもいいですか？」

ラクス「はい、どうぞ」

カイト「失礼しますよ」

ヒイロ「……」

俺は一言ここでヒイロは無言で歌姫の部屋に入る

ラクス「どうかしましたか、カイトさんヒイロさん？」

面倒だから用件だけ言つてとつとつと出よう

カイト「貴方を、ザフトへ返すことになりました」

ラクス「それは本当ですか？」

ヒイロ「ああ本当だ」

カイト「準備が出来たら格納庫に来てください。では私は此で」

ヒイロ「……」

用件を言つた後俺とヒイロはせつねと並んで行った

格納庫に向かうとロウがいた

カイト「よう、ロウ」

ロウ「ようカイト、どうかしたのか?」

カイト「今から、ちよつと歌姫を返してザフトに会って行くんだ」

ロウ「マジかよ..」

カイト「ああマジ」

ロウ「お前も、たいへん何だな」

カイト「まあな」

ヒイロ「ロウ、頼んでおいた物は出来たか?」

ロウ「ああ、ばっかりだ

ロウはそう言いウイングガンダムを指す

カイト「見事なもんだな」

ウイングガンダムの腕にはビールライフルが握られていた

流石はロウだな、少しの間につくるとは

ヒイロ「感謝するロウ」

ロウ「何、こっちもメカをいじらせてもうつてありがとう」

何ともロウらしく答えた

ラクス「カイトさん」

ロウと話しているとラクスが宇宙服を着てこちらに来た

カイト「では、ラクスさんには私のマスラオに乗つてもらいますか  
ら」

ラクス「分かりました」

ヒイロ「では行くか」

その後歌姫とマスラオに乗り

カイト「カイト・トウサカ マスラオ出る」

ヒイロ「ウイングガンダム 発進する」

カタパルトから出撃した

カイト「さて何処にいるかな」

レーダーを見ながら探す。今のところ機影なし

ラクス「何故、私を返してくれるのですか?」

ラクスが俺の顔を見て聞く。まあそれが当然か

カイト「私達と、貴方が一緒にいても特に意味はないからですよ」

実際、一緒にいてもザフトの標的にされるだけだし

なら、ザフトに返したほうが面倒なことにならないだろ？。多分

まあ、本当の目的はアーケンジエルと接触する為と、歌姫に彼と  
会つてもらひつ為だが

ラクス「ですが、私を返した後に攻撃をされたらどうするのです？」

愚問だな答えは勿論

カイト「私とヒイロで、殲滅するまでですよ」

俺がそう言つと歌姫は黙り、その瞬間レーダーに機影確認

ヒイロ「カイト、MS一機と戦艦が来るぞ」

ヒイロから通信が入る

カイト「さて、何が来たかな？」

田標をズームして見てみると

カイト「これは、面白い」

向かつてきた機影はストライクとアークエンジェル

探す手間が省けて丁度よかつた

ヒイロ「あのミッド戦艦は、前にお前からの資料で見た連合のものか？」

カイト「そうだ、手を出すなよ。まず出方を伺おう」

ひとつあえず、まずは相手がビートてるかみよう

? 「其所の一機、応答願います

カイト「何だ？」

相手に通信を入れる。この声はラミアス艦長だな

ラミアス「あなた方は、何処の所属ですか？」

いきなり所属を聞くか

カイト「私達は、何処の所属でもありません」

? 「何処の所属でもないだと？」

さつときは違う声、恐らくナタルさんか

ラミアス「少し、事情を説明していただきたいので艦に来てくれませんか？」

阿呆か、通信でも十分 なのにわざわざ艦に呼ぶとは

まあこれで接触出来るからいいか

カイト「私達の、身の安全と機体を調べないのならいいですよ」

ラミアス「分かりました。ではストライクと一緒に着艦してください」

？「艦長！」

最後に声が聞こえたが通信はそこで切れた

ヒイロ「いいのか？あの艦と接触して」

カイト「ああ問題ない。大丈夫だ」

それに歌姫も押し付けるしな

俺達はストライクと共にアークエンジェルに着艦した

**接触（後書き）**

次回はアークエンジェルクルーとの会話です。

ではまた次回も宜しくお願ひします。

## クルーとの会話（前書き）

更新遅れてしませんでした。

でせじつわ

## クルーとの会話

アークエンジールの格納庫に入ると、クルー全員が俺とヒイロの機体の周りに集まっていた

カイト「すいません。ラクスさん、巻き込んでしまって」

マスラオ内で歌姫に頭を下げる。本当は、下げるくないんだがじょうがない

ラクス「いえ、お気になさらないでください」

歌姫は、普通にあの場ではじょうがないと思ったのか俺にそつぱつ

カイト「すいません」

俺はもう一度頭を下げ、モニター越しにいるクルーを見る

カイト（やれやれ、集まつて来やがったな）

全員、珍しい物を見るよつた目で見ている。まあ、見たことない

Sが田の前にあれば当然か

カイト「では、ラクスさん行きましょう」  
ラクス「はい」

俺は、歌姫の手を握りコックピットを開け下に降りた

ヒイロも丁度降りたようで下で会流した

? 「おい、ちよっと通してくれ

集まっている奴等の、後ろから3人こっちに向かってきた

恐らく、『ミニアス艦長とナタルさんそれと鷹だらう

ナタル「君達が、この機体のパイロットか?」

ナタルさんが睨みながら俺とヒイロを見て聞いてくる

ヒイロ「そうだ」

カイト「そうですが」

俺とヒイロは無表情で普通に答える。すると周りが騒ぎ出した

ウミタス「まだ、子供じゃないの」

カイト「何を、驚いているんです？あれのパイロットも、同じぐらいのコーディネーターの少年が乗っているのでしょうか？」

そつ言つた瞬間俺はナタルさんに睨まれた

ナタル「貴様！何故パイロットのことを知つているー？」

カイト「パイロットは、あなたの方の後ろに立てる彼だと思つたからですよ」

俺がそう言つた後、全員後ろを見ると其の後ろにはパイロットスーツを着たキラが立っていた

ムウ「率直に、言わせてもらひが」

鷹が俺達を見て喋り出した

ムウ「君達、ゴーティネーターだろ?」

下らない質問だ。こいつは、MSに乗ってる奴等全員ゴーティネーターとも思つてんのか?

カイト「残念ながら、答えはNOですよ」

そう言つた瞬間、ナタルさんにまた睨まれたがまあ気にしない

「ハニマス「じゃあ、あなた達はナチュラルなの?」

カイト「以外何があるんですか?まあ、一人違いますが

「ムウ「違う?」

ヒィロ「その話は、別の部屋でしないか?」

ヒィロが、周りを見ながら言つ。確かに此所では話すらいな

「ハニマス「分かりました。じゃあいつかく」

「ハニマス艦長に案内され、俺達は別室に案内された

ムウ「それで、一人違つとはどういふことだ？」

部屋に入り、座った瞬間鷹が聞いてきた

カイト「質問の前に、あなたは場を考えて発言をしたほうがいいですよ」

一応忠告してやる

ムウ「ああ、それについては俺も反省しているよ

カイト「ならいいですが」

ナタル「それで、一人違つとはどういふことだ？」

ナタルさんが俺を睨み同じ」とを囁つ

カイト「言った通りの、意味ですよ。ラクスさん」

俺が歌姫の名前を呼ぶと、歌姫はヘルメットを取った

ラミラス「え？ ラクスさんてまさか！」

ビウやら知つてこるようだな。まあ有名人だから当然か

ムウ「まさか、あのプラント最高評議会議長の娘か？」

ヒイロ「やうだ

全員「なー」

全員驚いている。まさか、こんなところで最高評議会議長の娘と会  
うとは、思わなかつたからだらう

まあ、本当はもう少し早くこの艦にいる筈何だがな

ナタル「やはり貴様等は」

力チャ

ナタルさんが、俺達に銃を向けてきた

ヒイロ「何のつもりだ？」

ヒイロが、目を細めてナタルさんを睨む

ナタル「お前達二人も、コードィネーターなのではないのか？」

阿呆か、この人は人の話を信用しないのか？

カイト「仮にそうだとしても、何故銃を向けるんです？まさか、コードィネーターだからという理由じゃありませんよね？」

ナタル「そうだと言つたら、貴様はどうする？」

ナタルさんが睨み俺に向つ。本当にうらぬえ

カイト「別に、 ただ呆れるだけですよ」

ナタル「何?」

俺の答えが以外だったのか、 ナタルさんが驚いている

カイト「何もやっていない人間に、 銃を突き付ける。 それが、 連合軍の人に対する態度かと呆れるだけですよ」

ため息を吐きながら俺は言つ

ナタル「コーディネーターは、 人とは違う

はあ違う? やつぱり所詮は連合兵か

カイト「何が違うんです? 優れてるから何て言つたら、 ナチュラル  
だってコーディネーターに匹敵する能力を持つている人がいるでし  
ょう? 容姿も何も変わらないのに、 何が違うんですか?」

ナタル「違うな、 奴等は我々より優れた力を持ちそして我々人間を  
見下す敵だ!」

カイト「それは、あなたの勝手な考へでしょ？今此所にいるワクスさんやさつきの少年はあなた方を見下していましたか？」

ナタル「それは・・・」  
カイト「あなたも、ブルーコスモスと同じよつになりたいんですか？」「コーディネーターという理由で罪のない人を殺し、コーディネーターは全て敵という解釈をするんですか？」

ナタル「私は、奴等のよつな人間ではない」

ヒイロ「アンタの今の、発言行動は十分ブルーコスモスと同じと言えると俺は思うが？」

ナタル「く！」

俺の発言と、ヒイロの発言によつナタルさんは黙つた

ワクス「とりあえず、その話は中断しましょ？」

ワクス艦長が話を中断させた

カイト「分かりました」

ヒイロ「……」

ムウ「一応聞くが、お前達はザフトじやないんだな？」

ヒイロ「あ、そうだ」

ハラス「じゃあ何で、あなた達は彼女と一緒にいるの？」

まあ、それは当然の疑問だな

カイト「私と仲間が、偵察に出た時その先で連合とザフトが戦闘していましたね。その近くで、ラクスさんの乗る脱出ポッドを発見し回収したからですよ」

本来ならそのまま、口ウがいなくなつた後で漂流していたポッドを、ストライクが回収するんだがな

ヒイロ「それで、ザフトにそこそつを返そつとゆつた時お前達と遭遇した」

簡単に事情を説明し終えると、ラミアス艦長とナタルさん鷹の三人が小声で何か話をし出した

暫くすると全員俺達を見る

ラミアス「君達の乗っているMARSは、何処で手に入れたの？」

カイト「私達が、独自に開発した機体としか今は言えません。出来れば、あまり機体のことには触れないでください」

機体のことは、こう言わないと色々面倒だからな

ラミアス「分かりました。それは本艦に来る時の、条件でしたからこれ以上は触れません」

ナタルさんが、納得いかない顔で俺達を睨んでいるが機体の話は終わつた

ムウ「分かっていると思うが、暫くお前達はこの艦に乗つてもうつぞ

やはりそうなるか。まあ予測範囲内だがな

カイト「分かりました」

ヒイロ「了解した」

ナタル「それと、貴様等にはこの艦を護衛してもらいたい」

カイト「私達のよつな、得体の知れない者にこの艦を守れとは何故です？」

理由は恐らく、戦力が足りないからだろうがあえて聞く

ナタル「悔しいが、本艦には戦力が足りない」

ラミアス「だから今は、猫の手も借りたい状況なの」

予想通りの答え

カイト「いいでしょう。ただし条件があります」

ラミアス「条件？」

カイト「はい。私達をこの艦が連合艦隊と合流するまで、雇つてほしいんです」

ムウ「雇つ？」

カイト「はい」

ただ働きは、正直好きではない。少しでも得をしないとな

ナタル「その条件を、拒否したら？」

カイト「別に、私達は此所からいなくなるだけですよ」

あるじつする？まあ恐らく雇つと思つがな

ラミアス「・・・分かりました。貴方達を雇います」

ナタル「ラミアス艦長！」

カイト「了解しました。さてヒイロをつづくことだが構わないか?」

ヒイロ「ああ構わない」

俺達は三人を見る

ヒイロ「ただし、俺達を後ろから撃つような真似をしたら」

カイト「その時は、覚悟してくださいよ」

俺とヒイロは三人に殺氣を出しながら言つ

ムウ「そんなこと分かつている」

ラミアス「決して、そんなことはしないと約束します」

ナタル「ただし、貴様等が逆に我々を裏切らうとしたら」

力チャ

ナタルさんが再び銃を向けるが

ザンツ

全員「な！」

俺は斬影でナタルさんの銃を切り裂いた

カイト「あまり、私に銃を向けないでください。ハハハ裏切り何かしないので大丈夫ですよ」

力チャン

斬影を鞘にしまい俺は笑いながら三人を見ていう

ムウ「お前」

ヒイロ以外の奴等は、俺を睨むどころか怯えているようだ

まあ、いきなり刀を抜いて笑いながら三人を見ればそうなるな

昔から、何かを向けられるつといそれを破壊したくなる

全く悪い癖だな

カイト「すいません。ちょっと癖が出てしました」

「」は素直に頭を下げておく、俺が悪いからな

「ミニアス「そそう癖なの、・・・・とりあえずフラガ大尉彼等を部屋に案内してあげて」

ムウ「ああ分かつた。付いてこい」

カイト「その前に、まだ名前を名乗つていませんでしたね。私の名はカイト・トウサカです」

ヒイロ「俺はヒイロ・ゴイ」

ラクス「私はラクス・クラインです」

「ミニアス「私はこの艦の、艦長のマリュー・ミニアス大尉です」

ナタル「副長のナタル・バジルール中尉だ」

ムウ「俺はムウ・ラ・フラガ大尉だ。じゃあ行くぞ」

カイト「はい」

手早く自己紹介をすませ、俺達は部屋に向かった

ナタル「いいんですかラミアス艦長。あのよつな連中を信用して？」

ラミアス「今は戦力が必要よ。それに、彼等は怒らせなければ大丈夫よ。バジルール中尉、くれぐれも彼等を怒らせないよう注意してください」

ナタル「了解しました」

ナタルさんは、そう言つと部屋を後にした

ムウ「此所が、お嬢ちゃんの部屋で隣がお前達の部屋だ」

現在、鷹に案内され俺達は部屋の前にいる

ムウ「それからカイトとヒイロ、お前等一人はちよつと検査を受け  
てもらいうからな」

カイト「分かりました」

ヒイロ「分かつた」

まあ、口で違うと言つても確信はないからそれが妥当だな

その後俺とヒイロは医務室に行き、採血をした。結果は勿論俺達は  
ナチュラルだった

ムウ「すまなかつたな疑つて」

検査が終わった後、鷹が俺達に謝つてきた

カイト「いえ、疑いがはれて何よりですよ」

ヒイロ「別に気にしていい」

ムウ「そうか。ならいいんだが

別にアンタに謝られても、俺は何とも思っていないがな

その後鷹は、ブリッジに向かつて行ったので俺達は部屋に向かい歩いていると

? 「嫌よー。」

食堂のほうから声が聞こえたので、向かつてみると其所にはキラと  
その友人達がいた

カイト「どうかしましたか?」

とつあえず中に入つてそつとみると

フレイ「な何で、『コーディネーター』がいるのよー。」

赤い髪の女がそつと。確かフレイ・アルスターだったか?

カイト「失礼ですが、私とヒイロはコーディネーターではあります

んよ

フレイ「嘘よー。アンタ達もコートライネーターに決まってるー。」

? 「フフレイ、そんなこと言わなくたって」

もう一人の女の子がフレイを止めている。ミニアリアだったか?

ヒイロ「信じられないなら、この艦にいるフラガという男か医務室の奴に聞け。聞けば俺達がコートライネーターではないと証明してくれる筈だ」

フレイ「つかつたわよ」

フレイは悔しそうな顔をしながらヒイロに向つ

カイト「ああ、ついでですから言こますけど、私達もこの艦に暫く乗ることになりましたから」

全員「えー。」

キラ「そう何ですか？」

全員が驚いている中でキラが聞いてきた

カイト「はい。私達がこの艦から降りるまで暫く宜しく

キラに左手を差し出す

キラ「あーはい宜しくお願ひします」

キラも右手を出し俺とキラは握手をした

その後は全員軽い自己紹介をして食堂に座っていた

カイト「で、わたくしは何を騒いでいたんです？」

騒いでいた理由は知っているがミリアリアに聞く

ミリアリア「それが、カイトさん達の食事をフレイが持つて行きたくないと、言つたから何ですか？」

俺は聞いた後フレイを見ると

フレイ「そそれは貴方達が『一ノタイネーター』だと思ったから……」

顔を下にしながら言つてゐる為、一応悪いとは思つてゐるのか？

そして

ラクス「あのすこません」

原作通り歌姫が食堂にやつてきた

それでどうなるかな？期待しながら俺は見物する」とした

## クルーとの会話（後書き）

次回も多少会話をしてから戦闘をします。

では次回も宜しくお願いします。

水瓶やつて戦闘（前書き）

更新遅れています

でせりつわ

フレイ「ちゅちゅつと、何で此所にコーディネーターの子がいるのよー。」

喧しいな。高々歌姫が来たくらいで

ラクス「実は、喉が乾いてしまいました何か飲み物を頂けませんか？」

フレイの言葉を気にせず歌姫は近付く。天然は怖いな

フレイ「やだ！近寄らないでよー。ザフトのコーディネーターー！」

ラクス「わたくしはザフトではありません。ザフトは軍の名前で、正式には・・・」

フレイ「なつなんだって一緒にコーディネーターなんだからー。」

ラクス「一緒ではありませんわ。確かにわたくしはコーディネーターですが、軍の人間ではありませんもの」

歌姫はまだ近寄りつとする

フレイ「コーディネーターが、馴れ馴れしく私に喋ったり近寄りつ  
としないで！」

全く、ただ見物しているだけでいよつと思つたのに、こんなに喧し  
いと何か言いたくなつてしまふな

キラ「・・・」

あらり、キラはかなり今の発言でへこんでるよつだな

カイト「はいはい。2人共とりあえず其処までですよ」

2人の間に、手を叩きながら入る

フレイ&アム・ラクス「カイトさん」

ヒイロ「・・・全く一々五月蠅い奴だ」

ヒイロも、呆れながら立ち上がる

フレイ「何よアンタ！コーディネーターの方を持つ気！？」

フレイがヒイロに突っ掛かるが

ヒイロ「お前と話しても時間の無駄だ。・・・カイト、俺は格納庫に行つていろや」

カイト「ああ了解」

ヒイロはさう言つと、フレイを全く相手にせず格納庫に向かつて行つた

フレイ「何よアイツ、コーディネーターの味方する何て」

全くコーディネーター コーディネーター五月蠅い。て言つかうござくなつてきた

カイト「五月蠅い黙れよ」

フレイを睨みながら素で言つ

フレイ「なつ何よー?」

カイト「さつきから『一テイネーター』『一テイネーター五月蠅いんだよ。』このブルーコスモスが

フレイ「わ私は、あんな過激な奴等じゃない!」

カイト「何が違う?『一テイネーター』だからって理由で、毛嫌いして話も聞かないで拒絶して敵と決め付けてる今のお前と、ブルーコスモス一体何が違うのか俺に教えてみろよー!?」

イライラする。下らんことで素が出あまつし

フレイ「そそれは・・・」

言い返せないよな。俺の言つてる大半は、今のコイツに並んではまつてんだから

カイト「それにお前は、助けてくれた友達に平氣で酷いこと言えるんだな」

俺はキラを見ながら言つ

フレイ「わっ私は別にキラに言つた訳じゃ……」

言葉の意味などを、理解せず言つているのかコイツは？

カイト「キラもコーディネーター何だから、お前はキラに言つてな  
いつもりでも、当然キラは傷つくだろ。それとも実は分かつて言  
つてたりするのか？」

フレイ「・・・・・」

フレイは何処かに行つてしまつた

サイ「フレイ！」

サイがフレイを追つて行つた

カイト「言い返せなくなつたら逃げるか。全く子供だな。ああいう  
奴がいるから、人種差別何かで戦争がおこるんだよ」

ミコアリア「あつあの、何もあそこまで言わなくても」

呆れていると、ミコアリアが何か言つてきた

カイト「別に、ギャアギャア五月蠅いから黙らせただけですよ」

口調を敬語に戻し話す

キラ「カイトさん僕のことなら別に・・・」

カイト「別に、ただ五月蠅いから黙らせただけだ。ラクスさん部屋まで送りますよ」

ラクス「はっはー」

キラ「あつ僕も行きます」

その後、歌姫とキラと一緒に食堂を後にした

カイト「ラクスさん、あまり出歩かないでください。面倒ですから」

ラクス「すいません。迷惑を掛けてしまいました」

カイト「分かつたなら、いいですけど」

キラ「あの、カイトさん」

キラが俺を呼ぶ

カイト「何だい？」

キラ「どうして、口調を変えるんですか？」

ラクス「私も気になつていました。何故何ですか？」

面倒だな理由話すの、まあいいか

カイト「別に理由何てない」と言つた、敬語使つての面倒だから普通の口調で話す

キラ「それが、本来の口調何ですか？」

カイト「ああそうだ」

ラクス「やつと、気になっていた違和感が解りましたわ」

違和感？口調のことなのか？

カイト「違和感とは？」

ラクス「いつも、カイトさんは私達と話している時に違和感を感じていました。違和感の正体は口調がいつもと違うと解ったからです」

普通に話していたつもりだったが、やはり慣れない敬語では違和感があつたようだな

カイト「まあ、もつお前等相手に敬語は使わないつもりだからいいけど」

ラクス「話し難いからですか？」

カイト「ああ、さて部屋に着きましたよ

他愛ない、会話をしたら部屋に着いた

ラクス「あつがとつぱれこます。カイトさん」キラ様

歌姫はやつ言い一礼する

カイト「別に礼何ていいよ」

キラ「いえ」

ラクス「貴方も優しい方なのですね」

歌姫がキラを見て言つ

キラ「そんな」とありません。僕も貴方と同じ、コーディネーター  
ですから」

カイト「お前は、ラクスが同じコーディネーターだから優しく接し  
てんのか?」

キラ「やつこつ訳じや ・・・」

はつきりしない奴だな

「ラクス、貴方が私に優しく接するのは、貴方が優しいからではないのですか？」

キラ「僕は・・・」

全くはつきりしない奴だな。イライラする

カイト「お前は、ラクスにもちゃんと友達と同じように接してんだから、お前は優しい奴何じゃないのか？」

キラ「カイトさん、そういうのをいつのまにかもしません」

カイト「阿呆、やうのかもしませんじやなくてやう何だよ」

キラのおでこに軽くデコポンをしゅっ

キラ「痛ーはー」

キラが笑いながら返事をした瞬間警報が鳴った

カイト「敵か」

キラ「行きましょう。カイトさん」

カイト「ああ、ラクスは部屋にいる。決して外に出るなよ」

ラクス「分かりました。お二人共気を付けて」

カイト「ああ、行くぞキラ」

キラ「はい！」

俺達は格納庫に向かい走り出した

? 「其所の兄さん」

格納庫に入ると男が話し掛けってきた。確かマードックさんだつたな

カイト「何です？」

マードック「アンタ等の機体と、カタパルトは連動してねえから自走で頼むぜ」

カイト「了解した」

マスラオに乗り起動する

ヒィロ「Wガンダム発進するー。」

ヒィロが一足速く発進したようだ

カイト「マスラオ出るー。」

また俺は、漆黒の宇宙に向かい出撃した

カイト「敵は・・・まあアスラン達かな」

予想していると、しつこじて赤服達がやってきた

「ミニマス」「カイト君」「ヒイロ君」「キラ君」本艦を守りながら敵機を  
撃破して

3人「了解」

俺達は4機に向かつて行く

イザーク「どうことだ！何故あの2機が足つきと共にいる！？」

イザークが怒鳴る

アスラン「あの不明艦と、残りの3機がいないところを見ると、は  
ぐれたか一時的に手を組んだのだろう」

アスランは、的確に分析しながら答える

「ディアツカ」「どっちにしろ、全機いなくて助かつたぜ。あの5機と  
ストライク、それと足つきを相手にする何て絶対無理だからな」

「ディアツカが少し安心しながら言つ

「コル」「しかし、あの2機だけでも十分脅威ですよ」

ニコルが2機を見ながら言つ

アスラン「ああ。それにストライクもいるんだ。油断するなよ」

イザーク「分かっている！」

ディアツカ「援軍が来るまで、何とかもちこたえないとな

ニコル「そうですね。頑張りましょう」

アスラン「俺はストライクを叩く。ニコル達は、残りの2機と足つきを頼む」

アスランが3人に命令する

イザーク「俺は、あの羽つきを落とす！」

イザークは、Wガンダムに向かっていき

「ディアツカ」「じゃあ、俺はあの黒いのを

「ディアツカは、マスラオに向かい

「コル」「じゃあ、僕は足つきを」

「コルは、アークエンジェルに向かい進む

「アスラン」「キラ、今度こそお前を連れ戻す」

アスランも、ストライクに向かい戦闘を開始する

ヒイロ／＼イザーク

イザーク「羽つき!」

デュエルが、サーベルを抜き接近する

ヒイロ「また、お前か」

Wも、サーベルを抜きサーベル戦を始める

イザーク「羽つきー今度こそ落とす！」

ヒイロ「しつこい奴だ。そつまでして俺を討ちたいか？」

デュエルのサーベルを、回避しWが片腕を斬り裂く

イザーク「まだまだ！」

デュエルは、残った片方の腕でサーベルを抜き攻撃する

ヒイロ「ちつー！」

Wは回避したが、片腕を若干掠めた

ヒイロ「少しば、やるよひになつたなだが！」

Wは、デュエルを蹴り飛ばしライフルで片足を破壊する

イザーク「足ぐらい！」

デュエルもライフルを撃つが

Wはシールドを投げライフルを防ぎ

ヒイロ「其所だ！」

バスターライフルを発射し、シールドを破壊しそのままデュエルの  
もう片腕を破壊し

ヒイロ「武装を破壊する」

ライフルでシヴァを破壊した

イザーク「チイ！撤退する」

デュエルは戦闘続行不可となり撤退

カイト→Sディアツカ

ディアツカ「格闘戦主体なら」

カイト「ちつー。」

バスターは、マスラオに接近させまいと、一定の距離を保ちながら戦闘している

カイト「こんなに、離れられたらマスラオじゃきついな」

接近しようとするが、バスターの砲撃に邪魔され中々接近出来ない

ディアツカ「このまま、落とさせてもうひぜー。」

カイト「しうがない、機体損傷覚悟で突撃するか」

マスラオはバスターに接近する

ディアツカ「それとかー。」いつを喰らいな

バスターは、ライフルを連結させ散弾を撃つが

カイト「ファング！」

マスラオは、ファングを連結させ盾を造り散弾を防ぐ

ディアツカ「なつ！馬鹿な」

カイト「この距離なら..」

マスラオは斬影を抜き急接近する

ディアツカ「くそ！」

バスターはミサイルを、マスラオに乱射するがマスラオは全てミサイルを斬り破壊し

カイト「もうつたー！」

サーベルで、ライフルを破壊し蹴り飛ばし、ライフルで右肩と左肩を破壊する

ディアツカ「またかよーくそ撤退する」

バスターも戦闘不能となり撤退

カイト「アークエンジェルを守れ」

マスラオはファングを10個射出した

アークエンジェルVS一コル

ニコル「このー！」

ラミアス「回避！」

アークエンジェルは、ブリツツの攻撃を受けていた

まだ致命的な、ダメージはないがこのままではまずい

「コル「これで！」

ブリッツが、ランサーダーティを発射しようとした時

ペペペ

「コル「何！」

機体アラームが鳴り、前方と上下左右からマスラオから射出されたファングが、ビームを放ちながら向かってきた

「コル「何だ！？」

ブリッツは回避しながら、ライフルでファングを破壊しようとするが、ファングが速い為当たらず逆にファングの攻撃で片足が破壊された

「コル「くー速くて当たらない！」

破壊しようと頑張るブリッツだが、左右から突撃してきたファングが右腕に突き刺さり爆発した

ニコル「なつ！撤退します！」

ファングに敗北しブリッツは撤退した

カイト「さて、ブリッツも退いたから後はイージスか？」

イージスは現在原作通りストライクと戦闘中（原作通りなので戦闘シーンはカットします）

フレイ「パパをパパを助けて！」

カイト「うん？」

いきなり通信が入ってきた

ラミアス「カイト君にヒイロ君、接近してゐる友軍艦を大至急援護して！」

カイト&amp;ヒイロ「了解」

友軍艦は、攻撃されながら此方に向かってきた

フレイ「お願いパパをパパを助けて！」

カイト「チイー！」

ヒイロ「くー！」

援護に向かおうとした矢先、大量のジンが俺とヒイロの行く手に現れた

カイト&amp;ヒイロ「邪魔だ！」

バスター・ライフルとファングでジンを撃破し進む

まさか、このタイミングでフレイの親父が来るなどー。

向かっている間にも、艦一隻がジンに落とされ

ヒイロ「くー！」

カイト「間に合えー。」

キラ「やめろ!つー。」

俺達は叫びながら最後の艦に向かうが

クルーゼ「ハハハ、さよならだ

クルーゼは、無惨にも最後の艦を撃ち落とした

フレイ「イヤー！」

原作通り、フレイのお父さんは殺されてしまった

カイト「ちつ！助けられなかつた

俺はそう言い、シグーを睨むと同時にナタルさんが、全機に原作通り歌姫を人質に撤退しろという通信を送った

その後も、原作通りザフトは撤退し俺達はアークエンジェルに帰還

した

キラ「保護した人を、人質にするってそれが連合のやり方ですか!」

キラが、鷹に詰め寄り怒鳴つてゐる

ムウ「そうしないと、助からないほど今の俺達はピンチ何だよ

鷹も、悔しそうな顔でキラにさしつかつ

カイト「だからと言つて、流石にあんなこと二回目はないですよね  
?」

鷹に聞いてみる

ムウ「それは・・・」

何だよ。まだ実はやるかもしないのか?

ヒヤロ「これ以上、あのやつなことをするのなら俺達は抜けむ

ヒイロが鷹を見ながら「うわー！」

ムウ「分かってる。もうあんなことやられねえよ。お前達を敵に回すようなことはな」

一応分かつてはいるよつだな。まあ今度せつたら、ヒイロの壁つ通り俺も抜けるがな

そして

フレイ「アンタ達！」

フレイが、物凄い顔で俺達の前に来た

フレイ「何で？何でパパを助けてくれなかつたのー！」

ヒイロ「最善はつくした。だが俺達の力不足だった

キラ「いめんフレイ

フレイ「アンタ達、自分が戦えるからつてちやんと戦つてないでしょー。」

馬鹿だ。コイツは完全な馬鹿だ

カイト「君は、やっぱ言葉を選べないんだな

フレイ「アンタに、そんなこと言える資格があるのー? パパを見殺しこじしたアンタが!」

コイツ完全に俺を諒めてるようだな

カイト「確かにそんな資格はない。だが、必死で助けようとした俺達に、そんな言葉はないだろう。確かに俺達は君のお父さんを助けられなかつた。だがだからって、艦にいただけで戦いも知らない君に、そんなこと言われる筋合いはない」

フレイ「何よー。アンタ何かに私の何が分かるのよー。」

カイト「知らないな、自分勝手な奴のこと何てよ。逆に君は、人の気持ちを分かつていいのか?」

フレイ「そそれは・・・」

都合が悪くなると、黙り込む。餓鬼が

カイト「自分勝手で、人の気持ちも理解してない餓鬼が、ギャアギヤア喚くんじやねえよ。・・・行くぞヒイロにキラ」

ヒイロ「ああ」

キラ「はつはい」

俺はそう言つた後ヒイロとキラと一緒に部屋に戻つた

## 会話そして戦闘（後書き）

次回はオリキヤラが出ます

では次回も宜しくお願いします

## 運び屋ヘルメス（前書き）

更新遅れて申し訳ありません  
リアルで色々あり過ぎまして  
では訳文ですが宜しくお願ひします

## 運び屋ヘルメス

部屋に戻り、俺とヒイロとキラは無言で部屋にいる

カイト「キラ、大丈夫か?」

そんな重い空気の中、俺が口を開いた

キラ「・・・はい」

大丈夫とは言つてゐるが大丈夫じやねえな

カイト「あまり、フレイの言つたことは気にするなよ。一々気にしてたら、身が持たないからな」

アイツの言葉を、全部真に受けてたら疲れちまうからな

キラ「・・・はい」

やつぱり元氣ねえな。まあ当然か

ヒイロ「キラ・ヤマト

キラ「…………何？」

ヒイロ「戦場で余計なことを考へるな。死ぬことにならぬべし」

キラ「……やまつほんどうレスワルツ時のヒイロだけのことでは。やまつキラのことを、心配してこようだ

キラ「…………ありがとうヒイロ。覚えておくれ

キラがヒイロを見て、やつまつた瞬間再び警報が鳴った

カイト「ザフトか？だがさつきの戦闘から帰るとい、幾ら向こうも早すぎるな」

ヒイロ「別の部隊の、可能性があるな」

キラ「別の部隊？」

勘弁してくれよ。」「ちがひを今まで戦闘してたんだからよ

警報が鳴り止み、ラミアス艦長から通信が入った

「ラミアス、三人共、本艦に未確認の機体が接近して来ている。各自機体に搭乗してください。場合によっては戦闘もあります」

ラミアス艦長は、そつそつと通信を切った

カイト「だそうだ。行くぞヒイロ キラ

ヒイロ&アンド・キラ「了解

俺達は格納庫に向かった

格納庫に向かい俺達はそれぞれ自機に搭乗し

カイト「マスラオ出る

「キラ、キラ・ヤマト ガンダム行きます!」

ヒイロ「Wガンダム発進する」

また漆黒の宇宙に向かい出撃した

カイト「さて、何が来るかな？」

原作では、このタイミングで部隊が来た記憶はない。なら新たな敵か？

考えていると、機体がコントナを引っ張りながら一機、こちらに向かってきた

カイト「なつ何！」

俺は、その機体を見た時驚いた。理由は、その機体がこの世界には存在しない筈の、ウェイブライダー形態のΖガンダムだったからだ

更に、ブースターからはGN粒子が放出されている

ヒイロ「カイト、あの機体のパイロットはお前と同じ存在か？」

ヒイロが、Ｚを見て通信を入れてきた

カイト「ああ、恐らくそうだろう。あの機体と動力は、この世界には存在しないからな」

俺達の機体の前に、Ｚは接近し止まると通信を入れてきた

?「此方は、運び屋ヘルメスのエイジ・サエガミだ。ドゥエイン・ハルバートン少将の依頼で補給物資を届けに来た。着艦許可を願う」

エイジ・サエガミだと? 一体誰だ? その前に運び屋ヘルメスって何だよ! -

ラミアス「ハルバートン少将から! ··· 分かりました。着艦を許可します」

おいおい、そんな簡単に許可するなよ。黙だつたらどうあるんだよ?

そんな風に思つていると、俺達にも通信が入り艦内に戻つた

艦内に戻り、機体から降りると丁度Ｚからもパイロットが降りてきた

? 「着艦許可をいただき、ありがとうございます」

灰色のパイロットスーツを着た奴が、ヘルメットを取り俺達を見る

エイジ「運び屋ヘルメスの、エイジ・サエガミです。宜しく」

エイジと名乗った青年が、ラミアス艦長に片手を出す

ラミアス「アークエンジール艦長のマコニー・ラミアスです」

ラミアス艦長も、片手を出し一人は握手をした

ナタル「……」

一方の副長は、エイジをずっと睨んでいる

エイジ「では、この書類にサインを」

エイジは書類を出しひみアス艦長に渡す

ラニアス「何の書類?」

エイジ「荷物受け取りの、サインですよ」

ラニアス「分かりました」

ラニアス艦長は、納得したのか書類にサインをする

エイジ「それでは、私はこれで」

ムウ「ちょっと待った

エイジ「何か?」

鷹がヘルメットを被つたエイジを止める

ムウ「前から、気になつてたんだよ。運び屋ヘルメスの目的って何なんだ?」

?運び屋ヘルメスを、アークエンジェルのクルーは知っているのか?

エイジ「目的など、運搬に決まっているでしょ。私は運び屋何ですから」

ムウ「たかが運搬の為に、ナチュラルとコーディネーターの両方を、敵にするとは思えなくてな」

エイジ「運び屋は、運ぶのが仕事です。下らない差別などして客を選ぶようなやり方は私はしたくない。それが理由ですよ」

この男の目には、一瞬の迷いもない。本気のようだな。鷹もそれが分かったのか黙り込んだ

エイジ「では私はこれで」

カイト「待て」

この男に一番用があるのは俺だ

エイジ「今度は貴方ですか? 一体何ですか?」

カイト「ちゅうと話があるんだ。俺の部屋まで少し来てもいいえないか？」

俺は、こいつが何者なのか確かめなければならぬ

エイジ「すいませんが、まだ貴方と話す訳にはこきません」

やはり断るか。まあこの答えは予想通りだな

カイト「そ、うか。なら次会つた時に、俺の質問に答えてくれないか？」

yesの確率は代々五分ぐらいか？まあそれぐらいの確率なら十分  
だな

エイジ「分かりました。次に会つた時に」

まさかの yes。まあこれで退屈な原作の中で新たな目的が出来たな

エイジ「では、私はこれで」

エイジ「せまう、言つと、」乗り何処かに行つたようだ

その後、俺とヒイロとキラはまた俺の部屋に戻つた

カイト「キラ、運び屋ヘルメスとは何なんだ?」

まずは情報、奴のやつていることをキラに聞いてみた

キラ「運び屋ヘルメスは、ナチュラルとコーティネーターの、ビビ  
らの依頼も受け指示された場所に荷物を運ぶ運び屋です」

名前の通りの、運び屋のようだな。だが何で運搬何てやつているんだ?

中立を保つてまで、運搬何かする意味があるのか?

まあいいか。奴が仕掛けてこないなら

ヒイロ「運搬が目的。何か、裏があるかもしねないな」

キラ「せつぜつヒロもわづかず？僕も少し怪しこと御つてゐんだ」

カイト「まあ、情報ありがとなキラ」

キラ「いえ。じゃあ僕は用があるんでこれで失礼します」

カイト「ああ、分かった」

キラはそつと部屋を出て行つた

ヒロ「あの運び屋をどう思つ？..」

カイト「裏があるよつて思えるが、暫くは様子を見よ。下手に仕掛けで敵にされても困るからな」

ヒロ「それが、今の最善の策だな」

カイト「ああ、あとヒロもよつと一緒に来てくれないか？」

ヒロ「構わないが、何をする気だ？」

カイト「ちょっと、歌姫に用があつてな」

ヒイロ「そうか。出来るだけ隠密にな」

カイト「分かっているさ」

そう言った後、俺とヒイロはラクスの部屋に向かった

**運び屋ヘルメス（後書き）**

次回の更新は出来るだけ早くやります

では次回も宜しくお願いします

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2422o/>

他世界への介入者

2011年9月15日15時20分発行